

機関番号：32689

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2008～2010

課題番号：20682003

研究課題名(和文) 中世南都宗教言説史の構築

研究課題名(英文) Framing a History of Religious Discourses in Medieval Nanto (Nara)

研究代表者

藤巻 和宏 (FUJIMAKI KAZUHIRO)

早稲田大学・高等研究所・准教授(2010.4-9) / 客員研究員(2010.10-2011.3)

研究者番号：00468878

研究成果の概要(和文)：複数の寺院や図書館等で、中世南都の宗教的事象に関わる文献資料類の調査をおこなったが、調査データを整理し、活用してゆく際に、「宗教言説史」という枠組みを構築することを目指していた。これは、文学・史学・宗教学…といった近代的な学問分類に束縛されることなく対象を取り扱うために必要な作業であり、未完成ながらも、この三年間である程度の方向性を示すことができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：Surveys on documents relating to religious historical events in Medieval Nanto (Nara) were conducted in several temples and libraries. The establishment of a paradigm with the name “history of religious discourses” was pursued during the organization and utilization of the survey data. This task is necessary to treat subjects without being bound by the modernistic academic disciplines classified as literature, history, religious study, etc. Though the task has not been fully accomplished yet, it is believed that directions have been shown to some extent after these three years.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|------|-----------|-----------|-----------|
| 20年度 | 1,900,000 | 570,000 | 2,470,000 |
| 21年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| 22年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 4,700,000 | 1,410,000 | 6,110,000 |

研究分野：日本文学・宗教言説史

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：寺院資料、寺社縁起、神仏習合、中世、南都、宗教言説

1. 研究開始当初の背景

日本史学・日本語学・日本文学研究者による各地の寺院経蔵の悉皆調査を通じ、寺院資料が注目されつつある。そして、そのような研究手法が前近代の知識体系を闡明する有効な手段として認識され、寺院蔵書と密接な関わりを持つ公家や武家の文庫も対象となり、人文科学諸分野の基礎的課題としての「資料学」構築の必要性が説かれている。そうした動向の中で、小野随心院その他の寺院・文庫

調査を進め、ある程度の成果をあげてきた応募者は、如上の資料学的アプローチが、従来の文献資料の分析に基づく成果として描かれた世界像を再構成しうる可能性を見だし、“資料群”の動態を把握することの重要性に思い至った。こうした視点は、さらには近代的な学問分類の相対化へも繋がると考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究課題である言説史研究とは、文字として定着し伝存している文献資料だけでなく、背後に展開していたと想定される諸々の言説群をも考察対象とし、その展開相を跡付けてゆくものと規定できる。とはいえ、当時の“生”の言葉に直接アクセスすることが不可能である限り、実際には文献資料（必要に応じて図像資料も）を分析し、そこから遡及してゆくという手法を採ることになる。諸々の資料から見いだされる情報の一つ一つを、それぞれ孤立した“点”として捉えるのではなく、背後の言説群の動態を常に想定しつつ、その表出の一形態として把握するのである。

(2) そうしたスタンスで対象に接し、宗教（特に南都仏教、真言密教、中世神道、神仏習合、宗教儀礼...等）に関わる文脈で、言説群が生成・展開していった様相を検討することにより、宗教言説史を描くことが可能となる。その上で、まずは「中世」「南都圏」という範囲、そして「霊地ネットワーク（人的・思想的両面での結合）」という具体的問題を起点として考察を加えてゆく。

(3) なお、対象として扱う資料は、多くの未公刊文献も含め諸分野（文学・史学・宗教学・美術史...等）にわたる。それゆえ、近代的な学問ジャンルの枠組みによってそれらをいたずらに分類・限定することはせず、可能な限り多種の資料を検討する必要があると考える。

(4) さらに、種々の宗教言説を生み出した当時の知識体系という問題をも考慮する必要があり、言説の展開を成り立たせる思想的な基盤にも注目する。つまり、諸文献の分析を通じ霊地ネットワークの実態に迫りつつ、それを人的交流のみならず思想的結合というレベルで保証している当時の世界認識の解明までもが射程に入るのである。

3. 研究の方法

本研究課題における基礎的作業は、関連寺社の文献資料・図像資料等の調査・収集・検討である。公刊された資料の検討も重要であるが、その一方で、随心院や各地の寺院、文庫や図書館（金沢文庫、東大寺図書館、高野山大学図書館...）での資料調査も不可欠となる。そして、調査データはデータベース化し、常に参照しやすい形式で整理する。具体的には、収集したデータをテキスト化し、画像データと併せて整理するのであるが、手法としては、デジタルコンテンツとして各情報を関連付けた情報集積体の作成を目指すことになる。検索を支援する時代・書写者・伝来などの情報に加え、調査者の知見によって関連付けられるべきその他のターゲット・キーワードとして情報を貼付し、画像データも関連付けて

ゆくのである。これにより、資料群の動態を把握することが格段に容易となる。こうした作業を基盤とし、以下三点の達成目標を見据えつつ、研究を進める。

(1) 「霊地ネットワーク」という枠組みの設定による先行研究の読み換え。この枠組みを設定することにより、個別の寺社・宗派・地域等の問題と考えられていた様々な事象を、壮大なネットワークの中に定位し直すことが可能となり、それによってミクロな視点からは捉えることのできなかつた世界像を構築することが可能となる。

(2) 世界認識の基礎となる知識体系への着目。寺院資料の調査研究は、単に新たな文献を発掘するというだけにとどまらず、経蔵全体の蔵書（その形成と変遷）の検討から、当時の知識体系理解の一助とし、言説生成の基盤の解明をも可能とするのである。加えて、近代以降に収集された種々の蔵書（各種文庫・図書館等）も調査対象とすることにより、特定経蔵の調査だけでは掬い上げることのできない部分を補完する。同時に、多くの資料、即ち“研究資源”の整備と提供という側面でも有意義であると考えられる。

(3) 諸学編成史研究。1990年代以降、日本文学・日本美術史等の分野で、学問領域の成立を近代国家・学問の制度下という文脈で問い直すという試みがなされているが、こうした問題は、個別領域の成立を問うだけでなく、全学問領域の「編成」という総体的な視点から考察する必要がある。国際日本文化研究センターの「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」プロジェクトは、この問題について、特に近世～近代の出版に注目して取り組んでおり、前近代に築かれた学問体系の再編という視点を有している。しかし、諸学編成史を論ずるには、その前提として広く古代以来の学問制度やジャンル認識の変遷過程を把握することが必要であり、本研究課題が注目する中世の宗教者の知識体系も重要なテーマの一つである。本研究課題との直接的な関連性は薄いだが、将来への布石という意味でも、諸学編成史という視点は維持しておく必要があると考える。

4. 研究成果

(1) 資料調査。小野随心院や早稲田大学図書館における調査を中心とし、各種文庫・図書館等での単発的な調査も加え、諸種の（特に南都・密教事相・寺社縁起・蔵書目録関係の）資料調査をおこなった。なお、早稲田大学図書館での調査は、研究協力者である大学院生の教育（資料調査実習）という側面も有する。

(2) データ整理。調査した資料は書誌情報を記録するほか、デジタルカメラで撮影、あるいは紙焼き写真を依頼した。小野随心院や

早稲田大学図書館の調査では、研究協力者に書誌や撮影の補助を依頼。また、調査データの整理、および関連論文データの整理に際しても、研究協力者の協力を得た。テキスト情報と画像とをリンクさせたデータベースは、未完成（入力未了データあり、改良の余地あり）ながら、個人で利用することは可能な状態であり、情報検索を格段に効率化することができた。

(3) 資料群の動態の把握。個々の資料を検討することとは別に、経蔵、あるいはコレクション全体の形成・変遷を見てゆくことが、知識体系理解の一助となるという見通しを得ることができた。また、それに際し、ある時期における資料群の状態や分類方法を記録した蔵書目録を利用することの有効性を確認することができた。

(4) 近代学問。本研究課題との直接的な関連性は比較的薄いのが、近代において全学問領域が編成し直されたという「近代学問の起源と編成」という問題を考えるに際し、前近代における知識体系を比較対照として捉えることは重要である。また、寺院における蔵書分類の方法は、近代に至っても前近代のもののある程度踏襲しており、近代学問体系とは別の体系が維持されていることが確認できた。

(5) 聖地論。密教事相書のほか、寺社縁起等も含め、如意宝珠信仰に関わる資料を検討することにより、ある空間を“聖地”と位置付ける存在としての如意宝珠という視点を得るに至った。聖地は日本の寺社だけに限定されず広く論じられている問題であるが、こうした問題にも切り込んでゆく展望を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ①藤巻和宏、「略縁起の書記形態—写本と版本の往還—」、堤邦彦・徳田和夫編『遊楽と信仰の文化学』、査読無、2010年、59-73ページ
- ②藤巻和宏、「早稲田大学図書館所蔵寺社縁起関係資料調査報告」、『早稲田大学高等研究所紀要』、査読無、2号、2010年、97-99ページ
- ③藤巻和宏、「長谷寺と瀧蔵権現」、『神道宗教』、査読有、215号、2009年、1-24ページ
- ④藤巻和宏、「寺社縁起とお伽草子—東大寺縁起・石山寺縁起をめぐって—」、徳田和夫編『お伽草子 百花繚乱』、査読無、2008年、298-313ページ

〔学会発表〕(計12件)

- ①藤巻和宏、「「こもりくの泊瀬」の聖地論—エリアーデ・西郷信綱を超えて—」、伝承文学研究会・第384回東京例会、2010年12月18日、学習院女子大学
- ②藤巻和宏、「寺社縁起研究の回顧と展望」、寺社縁起研究会・関東支部・第100回記念例会、2010年7月31日、早稲田大学
- ③藤巻和宏、「文学研究の範囲と対象—寺院資料から近代学問を捉え返す—」、早稲田大学高等研究所シンポジウム「近代学問の起源と編成」、2010年3月13日、早稲田大学
- ④藤巻和宏、「長谷寺研究の現在—真言宗豊山派教師総合研修会参加報告を兼ねて—」、寺社縁起研究会・関東支部・第96回例会、2010年1月22日、早稲田大学
- ⑤藤巻和宏、「長谷寺靈験譚の勸進」、真言宗豊山派・平成21年度・教師総合研修会・パネルディスカッション「文化史から見た長谷信仰」、2009年12月11日、真言宗豊山派宗務所
- ⑥藤巻和宏、「縁起から見た長谷信仰」、真言宗豊山派・平成21年度・教師総合研修会・基調講演、2009年12月11日、真言宗豊山派宗務所
- ⑦藤巻和宏、「近代学問の起源と編成—シンポジウム開催へ向けて—」、早稲田大学高等研究所・第22回ランチタイムセミナー、2009年7月17日、早稲田大学
- ⑧藤巻和宏、「日本における「鷲の巣の中の少年(AT554B* The Boy in the Eagle's Nest)」譚の展開」、伝承文学研究会・第367回東京例会、2009年4月18日、学習院女子大学
- ⑨藤巻和宏、「鷲にさらわれた子の行方—良弁伝の生成と展開—」、早稲田大学高等研究所フォーラム：シンポジウム「僧伝のアジア」、2008年12月6日、早稲田大学
- ⑩藤巻和宏、「中世南都宗教言説史の構築—近代から見た前近代の知的体系—」、早稲田大学高等研究所・第6回月例研究会、2008年5月9日、早稲田大学
- ⑪藤巻和宏、「早稲田大学図書館千厩文庫の寺社縁起関係資料・瞥見」、寺社縁起研究会・関東支部・第78回例会、2008年4月28日、早稲田大学
- ⑫藤巻和宏、「寺には何があるのか?—寺院資料調査の現場から—」、早稲田大学高等研究所・第4回ランチタイムセミナー、2008年4月18日、早稲田大学

〔図書〕(計1件)

- ①勉誠出版編集部編・藤巻和宏企画、勉誠出版、『縁起の東西—聖人・奇跡・巡礼—』(『アジア遊学』115号)、2008年、全224ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤巻 和宏 (FUJIMAKI KAZUHIRO)

早稲田大学・高等研究所・准教授 (2010. 4-9)

早稲田大学・高等研究所・客員研究員

(2010. 10-2011. 3)

研究者番号：00468878